

全学学類・専門学群・総合学域群代表者会議

第 1 回本会議

令和 8 年 5 月 13 日（水）

（議事次第）

議題

- ・ 議長団選挙（議長選挙/副議長選挙）

タイムテーブル

当日の時刻	予定した日程
18:30	開会
18:30~18:35	出欠確認・資料確認
18:35~19:33	議長選挙演説・質疑応答
19:18~19:33	議長選挙の投票
19:33~20:58	副議長選挙演説・質疑応答
20:58	休会

出席者

学類等代表者 63 名 詳細省略

資料一覧

- ・ 令和 8 年度議長団選挙について
..... P26001-00
- ・ 令和 8 年度議長団選挙立候補者一覧
..... P26001-01
- ・ 令和 8 年度議長団選挙実施要項
..... P26001-02
- ・ 学長決定「筑波大学の学生組織等について」
..... P26001-03
- ・ 副学長決定「筑波大学における学生の組織及びクラス連絡会等について」
..... P26001-04
- ・ 「全学学類・専門学群・総合学域群代表者会議について」
..... P26001-05

以下、議事録

開会

○吉川 柊（令和 7 年度議長）

これより令和 8 年度第 1 回本会議を開会する。

今回は議長立候補者 1 名、副議長立候補者 3 名となっている。議長選挙に続き副議長選挙も行う。円滑な議事進行のため質疑応答フォームを作った。質問がある時にはこのフォームに記入をしてほしい。議長が指名したら学類と名前を言って内容を話すように。時間の都合上、質問者も回答者も簡潔に回答するように。

実施要項は以下の通りである。議長立候補者は定員と同数の 1 名であるため、演説、質疑応答、信任投票の流れで選出を行う。選挙人の過半数の信任がない場合は休会とし、第 2 日程を行う。

副議長は定員 2 名に対して立候補が定員を超過する 3 名であるため、全ての演説の後に質疑応答を行い、候補者 2 名に投票する。選挙人 1 名につき候補者 2 名に投票する。当選人が 2 名に満たない場合、当選人を除く上位得票者 2 名で決選投票を行う。決選投票は選挙人 1 人につき 1 枚の投票用紙を用いて投票を行う。第 1 回投票、決選投票ともに候補者のうち、選挙人の過半数の得票を得たものを当選人とする。

○吉川 栞（令和 7 年度議長）

議長演説に移る。議長立候補者の綱木さん、願います。

○綱木 映法（議長候補・社会学類）

皆様こんばんは。授業後のお疲れのところお集まりいただき、ありがとうございます。今年度、議長に立候補させていただきました、社会学類 3 年の綱木映法と申します。これより 10 分弱の演説をさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

まず自己紹介をさせていただきます。社会学類 3 年の綱木です。全代会には 3 年目で、1 年生のときに社会学類クラス代表者会議の副議長として全代会に入りました。初年度は総務委員会・学内行事委員会・新入生歓迎特別委員会に所属しておりました。2 年生のときには全代会で総務委員長に就任し、同時に社会学類では議長を務めました。また、学内の組織として、ピンク色のジャケットを着て新歓を担当する新入生歓迎委員会があると思いますが、そちらで総務局長を務めました。直近では、全代会の新歓において学類等代表の選出とオリエンテーションの班長を務め、今年からは学類等代表だけでなくクラス代表の掌握にも取り組み、クラス代表の名簿を集める取り組みを行ってまいりました。3 年生になり、再び学類の副議長を務めるとともに、全代会の議長になりたいという思いから、この場に立たせていただいております。

全代会の課題とは何だろうと考えたとき、私は主に 3 つあるのではないかと考えております。「こういう課題があって、これを解決しようとしている」という紹介としてご認識いただければと思います。1 つ目が教職員との接点、2 つ目が学群と院の隔たり、3 つ目が情報公開です。

1 つ目は、教員との接点をどう作るかです。教職員に話を聞いてみると、クラス担任であっても全代会の認知度には大きな差があるようです。また、学類によってはクラス代表の活動の温度がまちまちであるようです。学類に知られていない全代会は、当然ながら意見を吸い上げることができません。さらに、副学長からは、全代会は会議体として不完全なところ

があると思われているらしいとも耳にし、課題感を抱いております。ですので、全代会の地位を学内で確立しなければなりません。大学の役員の先生方と密に連携し、教職員に働きかけることができるのではないかと考えております。まずは全代会のことを知ってもらうため、場合によっては教職員に全代会を PR する機会もいただく必要があるのではないかと考えております。

2 つ目は、学群生と院生の隔たりです。クラス代表者会議の活動はまちまちであると申し上げましたが、院生は本会議の議決権を持った議員としては参加できません。そうすると、大学院生の意見は聞き入れられないのかということになってしまいます。実際、宿舍の値上げが問題となった際にも院生から数多くの声が寄せられましたが、全代会は必ずしも院生に開かれた場所ではないことから、意見を取り入れにくいという問題点がありました。ここは、院生との連絡の回路を作らなければならないと考えております。

3 つ目は、情報公開です。宿舍入居の文脈などで、「全代会は何もしていない」と受け取られてしまっている部分があると、さまざまところで公開されている文章や投稿を見て感じました。「そんなことはないのに、なぜ知ってもらえないのか」と考えたとき、これがある意味でのお叱りの声と捉えることもできますが、その前に、閉ざす情報と開ける情報をきちんと区別したうえで、できるだけ多くの情報を全代会からアピールしていこうと考えることもできるのではないかと思います。

もちろん、個人情報や、大学との信頼関係のもとでいただいている情報を外に流すことは控えるべきですが、交渉のプロセスや活動内容については、もっと公開する余地があるのではないかと考えております。

ここで、全代会には「2 つの顔」、すなわち「問題解決機関」と「お役立ち機関」の両方の側面があってしかるべきではないかと申し上げたいと思います。今私たちがやっていること——宿舍の値上げを止めたい、学生の声を聞きたい、食堂をどうにかしたい——は問題解決に近いものです。しかし、全代会に注目してもらうためには、もう少し身近なところの情報発信もしていく必要があるのではないかと考えました。

こうしたとき、全代会に似た国内の大学の組織を考えていくことが重要だと思っております。海外の大学とも交流は行っておりますが、文化やルーツが違い、取り入れられるものと取り入れられないものの差が大きいのが実状です。一方、国内の大学には筑波大学に近い組織を持つところもあります。たとえば慶應義塾大学の取り組みは素晴らしいと考えております。慶應義塾大学には塾生情報局があり、学事・学年暦やキャンパス情報を主体的に発信しています。こうしたお役立ち的な情報も、既存の SNS で流すかどうかは別として、発信していくことが全代会の知名度向上の一助になるのではないかと思います。また、慶應義

塾大学では本会議の議事録はもちろん、録画も認証付きで公開し、構成員以外にも幅広く見てもらえるようにしています。さらに、早稲田大学や東京大学は大学との交渉に成功しているところにポイントがあります。筑波大学は交渉や意見表明はするものの、成功しきらないところが一つの課題です。なぜうまくいっているのかを考える必要があります、それはホームページを見るだけではわかりません。実際に関係性を構築することが大切で、つくばは東京に比較的行きやすいからこそ、海外に行って検証するよりもコストをかけずに済みます。そうした手段も考える必要があるだろうと思います。

なぜ私かということです。私はいろいろなところで話す機会があり、相手の話を聞きながら、利害関係が対立した状況の中で双方にとってより良い落とし所に持っていくことを強みとしております。また、全代会だけでなく新入生歓迎委員会などでも役員を務めてきましたので、ある程度顔が知られているとも考えております。そういった点で、議長として外に向けて発信していく立場としては、私は適任ではないかと考えております。

最後に、このスライドを作りながら考えたことを申し上げて終わりにいたします。学生は皆、自分に関係することでも、大学のことでも、いろいろなことを自分なりに考えています。だからこそ、全代会という名称が一人歩きするのではなく、「成果」とともに語ってもらえる全代会になるよう、1年間邁進していければと考えております。少し長くなりましたが、ご清聴ありがとうございました。以上で、議長の立候補演説を終了いたします。

○吉川 柊（令和7年度議長）

18時55分まで質疑応答の時間をとる。質問はフォームに記入し、議長団で確認のうえ指名する。

○藤井 新之助（国際総合学類）

2点質問する。学群生と院生について話していたが、院生とのつながりを作っていくうえで、具体的に考えていることやプロセスがあれば教えてほしい。具体的でなくても構わない。

○綱木 映法（議長候補・社会学類）

院生のコミュニティ、任意団体があると聞いているため、そこと連絡を取ったり、学長・副学長経由で大学院の組織に働きかけてもらったりすることが必要だと考えている。院生と学長が懇談する機会は年に一回あるが、対象者が極めて限定的である。そこでは話しきれないこともあると思うので、教育生活環境調査だけでなく、顔と顔を合わせたからこそ話せることがあると考えており、そうした機会を何かしら作っていければと考えている。

○藤井 新之助（国際総合学類）

続けて 2 点目、クラス代表者会議について、どのように活発にしていくのか。

○綱木 映法（議長候補・社会学類）

クラス代表者会議については、学生だけの力でどうにかできる範囲はもう過ぎてしまっていると、半ば諦めているところがある。したがって、教職員をうまく巻き込んでいかなければならないと考えている。少し介入的になってしまうかもしれないが、たとえば学群長や学類長などが、クラス代表や学類等代表と話す機会をこちらから作るなどして、教職員に関わっていただく。これは教職員の認知度向上とも連動して行われることであり、それがうまくいけば、学類等代表の活動も少しは活発になるのではないかと考えている。

○廣田 千恵（芸術専門学群）

他大学から学ぶとあったが、実際に意見交換を持ちかける際に、どの立場の誰が中心となって交渉を進めるのか。また、たとえば海外大学との日程調整は困難な作業になると予想されるが、その点についてどのように継続していく見通しがあるのか。他大学との連携について、具体的な見通しがあれば伺いたい。

○綱木 映法（議長候補・社会学類）

国内の大学については、会議の代表ということで、議長を筆頭に交渉することを検討している。業務量がどの程度になるかはまだ見通しがついていないが、大きくなるようであれば、海外研修のように特別なプロジェクトチームを作ることにも検討の一つにあると思う。専門委員を含め、他大学との交流に興味のある構成員もいると思うので、そうした方をぜひ引き込んでいきたい。海外の大学との連携は極めて難しく、時差などが問題視されている。夏休みや、我々の空いている時間をうまく活用するしかないが、リモートも可能であるし、場合によっては書面でのやり取りも可能だと思うので、相手の大学の状況に合わせて柔軟に対応していければと考えている。

○吉川 柊（令和 7 年度議長）

19 時 1 分まで質問を受け付ける。

○龍田 和志（人文学類）

先ほどの藤井さんの 2 つ目の質問に対して、クラス代表者会議について「学生だけの力では諦めている」と返答していたが、それは綱木候補が在籍している 1～2 年といった短い期間での話か。長い期間をかければ可能であると考えるか。

○綱木 映法（議長候補・社会学類）

0 から 1 を生み出すことのハードルがかなり高いと考えている。活発なクラス代表者会議や学類は今のままでよいが、コロナ禍で引き継ぎが止まっていたり、学類長が変わってよくわからない状態になっているところに「学生主体で頑張ってください」と任せるのは、少し無責任ではないかと考えている。そこはやはり、クラス代表者会議の上に立つ機関である全代会が、ある程度手を差し伸べることが大切だと考えている。また、今は気持ちのある副学長が揃っており、恵まれている時期だと思っている。意欲の異なる学長・副学長に変わったときに、今のとおりの話が進むとは思えず、見通しが立たないところもある。チャンスがあるうちに生かしたいので、あまり先延ばしにせず進めていきたい。

○柳澤 愛（社会学類）

社会学類の副議長をはじめ、さまざまな団体で多くの役職をお持ちだと思うが、その忙しいスケジュールの中で、議長という仕事にどれくらいのリソースを割けるのか。また、副議長や委員長に対してどのように対策をしていこうと考えているのか伺いたい。

○綱木 映法（議長候補・社会学類）

1 点目について、2 年生のときは多くの役職があったが、現在は徐々に次の代へ引き渡していく段階にある。学業面では授業が少なく、単位的にも 30 弱取れば卒業できるため、リソースは割けると考えている。ただし、個人的な事情として、私はつくばに住んでおらず東京から通っているため、呼ばれてすぐに駆けつけるということは極めて難しい。この点は副議長の力をお借りしたいと考えている。とはいえ、議長としては対外的な活動がメインになると思われ、そうした予定はある程度事前にスケジュールが決まっているため、あまり心配はしていない。状況が変わってすぐに動かなければならなくなったときはそのとき考えるが、リモートやメールなどもツールとして活用していきたい。2 点目について、各委員会が主体的に担う仕事は、まず各委員会に頑張ってもらいたい。ただ、人数の関係もあり、生活環境委員会や教育環境委員会などは自委員会だけでは抱えきれないタスクもあると思うので、そうしたものは適宜、委員長団と一緒に行動することを検討している。特に今年は、外に出るような活動に課題感を持って取り組みたいと考えているので、副議長にはできるだけ中に向けた活動に尽力していただけると嬉しいと個人的には考えている。ただ、これは 3 名の立候補者から選ばれる方とも相談したい。

○吉川 栞（令和 7 年度議長）

19 時 8 分まで質疑応答の時間をとる。フォームへの入力があれば投票に移る。

○樫木 壮一朗（比較文化学類）

いろいろと課題を挙げられたと思うが、それを成し遂げていくうえで、各委員会に求めることがあれば伺いたい。

○綱木 映法（議長候補・社会学類）

一番求めるのは広報委員会になると思う。広報にはいろいろなあり方があり、これがいいと一概に決めることは難しいが、お役立ち機関としての全代会という面でも、情報公開という面でも重要である。広報という面では、何を載せるのか、どのように載せるのか、どこまで載せるのかといったところが鍵になる。本会議の議事録や短報など載せるものはあるし、その枠組みにとらわれず、ニュースのように何かあったときに投稿してもよいかもしれない。これは広報委員会と一緒に考えながらやっていきたい。また、生活環境委員会や教育環境委員会には、直接的に学生の声に耳を傾けるという点で、ある程度迅速な対応をお願いしたい。できるだけ情報を共有し、同じ方向を向いて、認識のずれなく、まとまりを持って取り組んでいければと考えている。

○吉川 柊（令和 7 年度議長）

19 時 13 分まで質疑をとる。それまでに質問がある者はフォームに記入してほしい。

○廣田 千恵（芸術専門学群）

クラス代表者会議について話していたと思うが、全代会に学类等代表として所属している学生は、ほとんどが 1～2 年生だと思う。一方で、大学院への進学を検討している学生や、宿舎に住む院生で全代会のサポートを必要としている学生もいる。3～4 年生からの意見を得たり情報を集めたりするために、どのような対策を考えるか伺いたい。

○綱木 映法（議長候補・社会学類）

クラス代表者会議の活性化と連動してくる話だと考えている。本来は各クラスに 1 人ずつ代表がいて、それがクラス代表者会議を組織しているのが望ましい姿だが、クラス代表者の名簿を作成するにあたり調査をしたところ、そうっていない学類があると聞き驚いている。現段階では、一応規則どおりにクラス代表が選ばれているはずなので、まずは各学類ごとにそうした学生から意見を聴取していく必要があると思う。宿舎については個別傾聴という形で行っているが、先ほどお見せした早稲田大学の事例では、全代会版の個別傾聴のようなものを行っており、話したい学生を呼び寄せて懇談会を各ブースで開いたりしている。全代会やクラス代表者会議にいない学生の意見をきちんと集めるには、フォームはハードルが高いと聞いているので、顔と顔を合わせる機会をセッティングできるのが望ましい。ただし、それを全体的に実施できるかどうかは別の話なので、まずはクラス代表者会議の活性化とともに、そこに所属する 3、4 年生からの意見をしっかり集めることが先決だと考えている。その中には編入生や総合学域群からの移行生、留学生もいると思うので、各学類のクラス代表者に集まる意見や、クラス代表者の身の回りの人が持つ不満などをきちんと集

められるようになれば、ある程度 3、4 年生からの意見も集められるようになるだろうと考えている。

○吉川 柊（令和 7 年度議長）

19 時 18 分まで質疑応答の時間をとる。

19 時 18 分になったため質問を締め切る。これより投票に移る。投票に先立ち、資料に関して訂正がある。資料 02 番の実施要項において、信任をする際に×や○などを書くと無効票となる旨の記載があるが、正しくは、信任する場合は「○」を記入し、不信任の場合は何も記入しない。○以外の記号を書いた場合は無効票となるので注意してほしい。

○藤井 新之助（国際総合学類）

投票用紙には、信任の際は「○」、不信任の場合は「×」とあるが、どちらが正しいのか。

○吉川 柊（令和 7 年度議長）

訂正する。投票用紙の記載どおりとする。オンラインの方はフォームへ回答し、対面の方はフォームには記入しないこと。

投票の際は、手元の用紙をこちらまで持参すること。学類等を読み上げるので、呼ばれた学類の者は前に来てほしい。まず、人文学類の議長に投票箱の中身が空であることを確認してもらってから投票を行う。混雑するため一方通行とし、出席確認も併せて行う。なお、オンライン参加者の投票については、公平性・秘匿性を保つため、総務委員会の専門委員がフォームの回答を代筆し、紙ベースに統一してまとめて投票箱に入れたうえで開票する。

○吉川 柊（令和 7 年度議長）

開票結果は、信任 58 票、不信任 4 票、無効 1 票となった。過半数の信任を得たため、本年度の議長として綱木映法さんを選出する。

○吉川 柊（令和 7 年度議長）

続いて副議長選挙に移る。なお、質疑応答のフォームへの記入は、候補者が演説を行っている間も可能である。

○龍田 和志（副議長候補・人文学類）

皆さん、こんにちは。人文学類 2 年の龍田和志です。ただいまから、副議長の立候補演説を始めます。よろしくお願いします。

まずは自己紹介です。学類は人文学類 2 年で、哲学主専攻を志望しています。人文学類クラス代表者会議の議長を務めており、全代会では総務委員会の事務部門長を務めております。中学校では野球部、高校では吹奏楽部を経験してきました。私の性格についてですが、これは全代会の他の人にも聞き取ったうえで出てきたもので、「優しい」「積極的である」「真面目である」「明るい」などです。これは私の強みだと私自身確信しております。

私の公約です。私も議長の綱木さんと同じように、あまり具体的なものを挙げるつもりはございません。私が皆さんにお約束する公約はただ一つ、「大学を、全代会を、より良くしていく」。これは必ずお約束し、実行していきます。そのための 2 つの柱として、私は「全代会の知名度の向上」と「意識改革」を考えております。これは必ず実行するというわけではなく、現時点で考えているものですが、副議長に当選した暁には、このようなことを進めていこうと考えております。

まず知名度についてです。全代会は知名度がそれほど高くありません。しかし、全代会の活動には知名度が高いことが重要です。全代会は、学生・クラス代表者会議と大学の間にあって活動している組織です。学生やクラス代表者会議から問題を発掘し、全代会から大学へ要請を出し、また大学から全代会を通じて学生へ情報共有を行ったり、全代会から学生へ向けてアンケートを行ったりします。そのため、全代会の知名度が低いと、当たり前ですがこれらの活動ができず、大学に関する問題解決が進まなくなります。ですので、私は全代会の知名度を上げていきたいと考えます。一つはホームページや SNS の活用です。現状、ホームページは総務委員会の情報部門や情報処理推進特別委員会などが更新し、SNS は一部広報委員会が運用していますが、他の委員会からも独自で SNS を発信したいという声が上がっております。そうした SNS 運用の見直しによって、よりスムーズに、より多様で深い情報を発信していければと考えております。また、全代会ジャケットの活用も進めたいと思います。現在は総務委員会が管理・貸し出しを行っていますが、その方法を見直し、皆さんが利用しやすくしたいと考えております。たとえば駐輪場での調査などで着用してもらい、全代会の周知を図りたいと思います。

次に、私が最もやりたい意識改革の話です。私は、構成員一人ひとりがより良いものを目指していく全代会を作り上げていきたいと考えております。なぜなら、これから副議長候補の 2 人がさまざまな公約を挙げるとありますが、その公約が必ずうまくいくという確信はありません。ですが、構成員一人ひとりの矢印が「より良い」に向いているならば、たとえ一度失敗しても、必ずより良い方向に向かい、いつかはより良いものができる確信しているからです。そのため、一人ひとりの意識改革が必要だと考えております。みんなが同じ矢印を向くためには、対話が必要です。しかし、対話とはお互いの理想をぶつけ合う、かなり苦しい作業です。「こうしたい、ああしたい」を知らない人に直接言うのは難しいですし、

自分のやりたいことを相手から批判されることもあります。その批判を受け入れるのもつらい作業です。そうした対話をしていくためには、信頼関係が必要です。信頼関係を築くためには日頃からの関わりが重要であり、一朝一夕で信頼は築けません。ですので、日頃の委員会活動の充実、また委員会を超えたイベントをたくさん開催していきたいと思います。副議長として、そうしたイベントの主催や、委員長連絡会での情報共有、各委員会への私自身の参加を通して、いつもの委員会をより充実したものにしていきます。また、私が哲学専攻を志望していることもあり、対話の雰囲気ややり方を私から発信・拡散していきたいと考えます。

私の強みとして、綱木議長と同じ委員会で 1 年間活動しており、全代会新歓の選出関連でも同じ班で活動していました。そのため議長と連携が取りやすいです。私はつくばに住んでもおりますので、すぐに動けます。そして、私の公約は議長の公約とシンパシーがあると考えております。全代会は学類等の集合体であり、全代会の空気が変われば、それは学類等代表に広まり、そこからクラス代表者・学生へと広まっていきます。クラス代表者・学生は大学の土台ですから、そこが活発化することは大学全体の活発化につながります。大学全体が活発化したとき、先ほど図でお示ししたとおり、全代会はクラス代表者会議や学生と大学の間で活動していますので、全代会の活躍によって筑波大学をより良く、より魅力的にすることが出来ます。綱木さんは「短期的には無理であるとして、大学の気持ちのある先生方の力を借りる」とおっしゃっていましたが、学生という土台が活性化すれば、そうした先生方がいなくなっても、全代会の活性化、クラス代表者会議の活性化はなくならないと思います。ですので、綱木さんが短期の活性化を目指す一方で、私はそれと並行して、全代会から学生への長期的なリターンを見越して、意識改革とクラス代表者会議の活発化を行っていきたいと思います。

皆さん、夢を見ましょう。より良い筑波大学ができている未来を、そしてそれをつくっている全代会を。そんな夢を私と一緒に作っていきませんか。ご清聴、ありがとうございました。

○関 智亮（副議長候補・知識情報・図書館学類）

ご紹介にあずかりました、知識情報・図書館学類の関と申します。今回、全代会副議長の選挙に立候補させていただきました。本日はよろしくお願いいたします。夜分も遅く、現在 19 時 45 分ごろになっておりますが、どうかお付き合いいただけるとありがたいです。

話に先立って、私のビジョンの前段階について説明させていただきます。「頼られる」というのは、学校の外や教職員、全代会の外だけでなく、全代会の中、すなわち皆さんからも、この組織に頼っていけばよいのだ、ということを基本ベースとして考えております。では、

この「頼られる」がどこに向けられているのかというと、基本的なところでは委員会です。たとえば、今話題の宿舍や、普段使っている学食に関しては生活環境委員会、図書館などに関しては教育環境委員会が関係します。あとは、全代会議員としての個人の部分、皆さん各部分、学類を代表した意見もあると思います。

それでは進めてまいります。まず自己紹介です。全代会では生活環境委員会に所属しておりました。前年度はクラス代表会議の議長も務めておりました。これまで私が活動してきたところ、私の強みを申し上げます。生活環境委員会の副委員長として、特に学食や宿舍など、生活環境の改善に取り組ませてもらいました。今進められている対話などの改善にも取り組みました。また、知識情報・図書館学類のクラス代表者会議の議長として、特に学生意見の集約に努め、その中で教育環境・生活環境の改善を提案させてもらいました。

では、私のビジョンです。「頼られる全代会」です。このきっかけというものが1つございます。これは1年生のときに感じたことですが、私は4月から全代会に入っていません。クラス代表者会議には1年の4月から入っていましたが、全代会には11月に入ったので、半年ほど空白の期間があります。その入る前に外側から感じたことが2点あります。まず「全代会が何をやっているのかよく見えない」こと、そして「結局何をやっているのかわからないので、その存在価値がどこにあるのか見えない」ことです。この現状には、強みと課題の双方があると思います。

まず、強みは大学の公的組織であることです。1点目に、学長・副学長と直接議論できること。全代会の活動の一環として学長との会合や副学長との懇談会があります。一般学生がなかなか学長・副学長にアクセスしにくい中で、これは全代会の強みです。2点目に、学生の声を正式に届けられることがあります。一方で課題は知名度が低いことです。これは龍田さんなどの発表にもありましたが、私の場合、学生生活課で活動する中で「全代会って何をやる組織なの」と言われてしまったことがあり、ショックでした。直接関わっている事務員さんですら認知度がよくわかっていない。知名度の低さから活動が見えず、何をしている組織か伝わりません。この課題を改善して「頼られる全代会」につなげていければと考えております。

「頼られる全代会」とは基本的に筑波大学の中の方を向いており、教職員にも、学生にも、クラス代表者会議にも、全代会の構成員にも、もっと頼ってもらえる組織です。特に着目していただきたいのはクラス代表者会議と全代会の構成員です。クラス代表者会議から選出されて議長・副議長として出ている方は多いですが、クラス代表者会議には入っているが全代会には入っていない方には、全代会が何をやっているのかわからないところがあります。私もその半年間、クラス代表者会議のところだけでは全代会が何をやっているのかよく分

かっていませんでした。入ってから初めて知ったのです。また、全代会構成員についても、自分が所属している以外の委員会が何をしているのかわからず、疑問を持っても、どこに、どのように相談すればよいのか、その窓口や委員会が見えないという問題があります。そうしたところを改善して、頼ってもらえる組織にしていきたいと思います。

その中でのビジョンとして「頼られる全代会」を掲げました。公約として、まず教職員に対しては、全代会と教職員間の交流の拡大を行いたいと考えております。次に学生に対しては、SNS の利用拡大を行いたいと考えております。ホームページは、検索して明確な目的があって初めて出てくるためアクセスが難しいのですが、SNS は 1 カ所でまとまって見え、もともと使っている人が多くアクセスしやすい利点があります。スワイプしていく中で全代会の存在に気づき、アクセスしてもらえるよう、SNS の活用を拡大したいと考えております。具体的には、現在は広報委員会がメインで活動していますが、研修をしたうえで各委員会の委員長も投稿できるように広げ、各委員会の取り組みを、より重点的かつ迅速に広報できればと考えております。クラス代表者と全代会構成員に対しては、各委員会の取り組みの広報を行いたいと考えております。たとえば学内行事委員会の学類新歓の援助金の取り組みや、私が所属していた生活環境委員会の学食での個別対話などを広報できればと思います。なぜクラス代表者をメインにしたかという点、まず全代会とクラス代表者が密接に関わっていることをアピールし、「クラス代表者が全代会に関わっていいんだ」という雰囲気を作ることを優先したいからです。クラス代表者が全代会を頼れない限り、全代会がクラス代表者に頼ることもできず、元も子もありません。委員会ごとに活動していると、曜日にサークルやバイトがあっても行きたくても見られず、何をやっているかわからなくなります。そこで、対面・動画・オンラインなどさまざまな形で各委員会の取り組みを提示し、曜日等に左右されず見てもらえるよう工夫したいと思います。

具体的に 1 点、「全代会と教職員間の交流の拡大」について説明します。各委員会と副学長などとの交流を定期的に創設し、これまでより幅広く密な議論や情報共有を行えればと考えております。副学長懇談会では、議題を提起して 2、30 分から 1 時間ほど話し合ってから終わり、という形になりがちです。それだと、大きな問題や長期的に議論しなければならない問題があったときに、後に議論するタイミングがなくすれ違いになってしまい、教職員側で進んでいることと全代会で進んでいることが別々に進行し、つなぐことができない段階まで来てしまうことがあります。より全代会の活動を、より深く副学長等に応援できればと思っています。具体的には、各委員会が担当の副学長とコミュニケーションを取る形が基本になると思います。他の委員会に興味がある方の出席や、議論は必要ですがクラス代表者会議への出席も検討できればと考えております。

次に、副議長として大切にしたいことは「声をつなぐ」ことです。これは基本的に大学の中がベースです。1 点目、構成員の意見を議長・副議長へつなぐこと。委員会の中で出た疑問が上に届かずモヤモヤで終わってしまっただけでは意味がないので、副議長として、私が委員会にお邪魔して話を聞き、意見を汲んでいければと考えております。2 点目、学生の声の適切な立場へつなぐこと。お昼に教職員の方々とランチミーティングを行っており、その中で出た意見を、対応可能な適切な部署・立場へ上げて対応してもらえようようにしたいと考えております。私は 3 年で、少なくともあと 1 年は在籍しますので、どの部署にお願いすればよいか、他の立候補者の方よりは多少理解できていると思います。3 点目、各学類・各エリアの視点を全学へつなぐこと。私は春日エリアにおり、たとえば「15 分間で移動してください」と言われても、春日エリアから第 1 エリアまでは少なくとも 3km ほどあり、自転車でも 15 分では厳しい面があります。そうした各エリアの視点・経験を生かし、より広い議論ができるようにしたいと考えております。

最後に、私のモットーは「困ったら、とりあえず全代会へ」です。学生からも教職員からも、困ったらとりあえず全代会へ相談してみよう、と思ってもらえる、誰からもより一層近い全代会にしていきたいと思っております。ぜひ、そのために皆さんの一票をいただければと思います。どうかよろしくお願いいたします。以上です。ありがとうございました。

○藤井 新之助（副議長候補・国際総合学類）

お忙しいところお疲れさまでございます。国際総合学類 2 年の藤井新之助と申します。よろしくお願いいたします。

最初に、軽く私について紹介させていただきます。昨年度はクラス代表者会議副議長として全代会に所属し、学内行事委員会・新入生歓迎特別委員会などの委員会を経験してきました。今年も引き続きこれらの委員会で活動していきたいと考えています。特に新入生の人からは「たくさんやっている」と思われそうですが、そんな私にも、全代会のことをよくわかっていない時期がありました。よくわからないまま参加していたのです。なぜわからなかったかという、全代会が何をしているのかを、一学生としても構成員としても分かる機会が少ないからです。せっかく全代会の構成員なのに、自分たちが何をやっているのかが自分でもわからない、わかってもらえないというのは、寂しく、残念だと思います。私は、学生の皆さんにも、もちろん全代会の構成員の皆さんにも、もっと全代会を近くに感じてほしいと思います。

私のビジョン、目指すことは「一人ひとりに寄り添う」です。これは、一人ひとりに寄り添う全代会をつくっていききたいということとともに、一人ひとりに寄り添う副議長でありたいということでもあります。そのビジョンを実現するためにやることが 3 つあります。

ただ、先に申し上げておきますと、もちろん諸課題が数多くあります。課題があるからこそ今できていないわけで、私はこれらを 100% 実現できるとは限りません。副議長になってから、いろいろな委員会や議長団の方々とお話をして、実現できる最適なパターンを見つけていきたいと思っています。

まず、存在感の向上です。1 つは SNS の活性化です。全大会の X をご覧になったことはあるでしょうか。発信を頑張ってくれていますが、フォロワー数は 2,600 人で、筑波大学生の 16% しかありません。しかも、昨年から 100 人しか増えていないという記録もあります。少し存在感が足りないのです。そこで、より多角的で、柔軟な、できれば双方向の動きを目指したいと思います。ただ、これは広報委員会と相談しなければならない話ですので、なってから考えていきたいと思います。広報委員会や生活環境委員会も同じような課題を感じていらっしゃると思いますし、他の副議長候補もおっしゃっていたように、はっきりとある課題ですので、ぜひ取り組んでいきたいと思います。次に、その他既存リソースの活用です。これもかなり被ってしまいましたが、BRIDGE や教育生活環境調査といった生活環境・教育環境委員会のプロジェクト、ハード面ではジャケットがあります。ジャケットはなかなか着る機会がありませんが、もっと活用すれば全大会の存在感を増やしていけると思いませんか。学生のために役立っているものや、ジャケット等の既存のものを活用すれば、もっと存在感を増やし、寄り添いの下地を作れるのではないかと思います。全大会を知らなければ、助けてほしいとは思いませんよね。まず、我々が寄り添うための下地を作っていきたいと思っています。

ここまでは方法的な話をしましたが、実質的な存在感も高めていきたいと思っています。それが、クラス代表者会議との連携強化です。先ほど他の候補もおっしゃっていましたが、学類によってクラス代表者会議の活発度は変わってきますし、学類によって課題も異なります。学類単位、学群単位では解決できない問題もあります。たとえば、今ここはとても暑いですよ。しかし、私が所属する国際総合学類が「エアコンをつけてくれ」と言っても、ここは 3A 棟、第 3 エリアですので、システム情報エリア支援室など、全学の会議にあげなければなりません。これを全大会として全体的に問題提起できれば、学類単位で解決できない問題を取り上げることができます。そのために、まずクラス代表者に全大会を知ってもらうため、本会議のオブザーバー参加を奨励します。もちろん全部参加せよというわけではなく、興味のある議題に来てよいという選択肢を提示します。さらに、できればですが、クラス代表者会議と全大会を直接つなぐホットラインを実現したいと思っています。「全大会に相談しよう」という選択肢がないことが問題ですので、全大会がいるということ、そしてそこにイーザーアクセスできることはとても大事だと思います。これは学生・クラス代表者会議に寄り添うための施策です。

次に、タスクの分散・最適化です。各委員長や各部局の長、私も学内行事委員会の学実委員などに関わっていますが、見なければならぬタスクの量・範囲はどうしても広がり、大変です。そこで私は調整役としての副議長を実践します。委員長連絡会や各委員会の場で各構成員とお話し、状況を把握して、こまめにタスクを配分し、適切なタスクの割り振りを一緒に考えます。また、適正な本会議運営も意識します。今は議長団選挙特有のもので本会議が長引いていますが、他の会議はきちんとやればかなりコンパクトです。去年は事前の資料共有や簡略化をかなり頑張ってください、軽量化・最適化されました。これを今年も続けていきたいです。さらに、私から追加できる価値として、昨年 3 回ほど行った意見聴取会をもっと活用し、意見聴取会を使った本会議の軽量化を進めていきたいと思っています。

最後に、所属・活動を超えたつながりを促進したいと思います。今の全代会は縦割りの委員会ですので、他の委員会に誰がいるか、先輩が誰かが分かりにくいところがあります。そこで「よくわからない」の解消として、他の委員会が何をしているか分かるような、構成員同士が気軽に関わられる機会を模索します。すでにあるもので言えば、去年はバーベキューや旅行を行いました、それはガッツリ入ってしまっただけで参加しにくい、怖いという面もあるかもしれません。そこで、他の委員会に少し顔を出してみるとか、他の委員会と合同で何かをやるようなものを一緒に考えていきたいと思っています。これは皆さんに寄り添う全代会を実現するためのものです。

私の強みです。1 年間、精力的に活動してまいりました。それから、委員長陣と同じ 2 年生であることは、委員長陣や 2 年生の構成員にとって私に話しやすく、私も寄り添いやすいという点があると思います。関さんのような 3 年生に比べると知見が 1 年分足りないことは否定できませんが、それは逆に柔軟な対応・思考ができるということでもあると思います。1 年間で自分なりにしっかりとした経験を積みましたので、それに柔軟な思考を組み合わせ、バランスのよい議長団を構成することができます。そして何よりも皆さんの「〇〇したい」を支えたいという思いは人一倍に強い自信があります。これがまとめになります。私が目指したいことは「一人ひとりに寄り添う」です。一人ひとりに寄り添う全代会をつくり、一人ひとりに寄り添う副議長になることです。ご清聴、ありがとうございました。

○吉川 栞（令和 7 年度議長）

これより質疑応答に移る。なお、副議長候補者への質問ではなく、議長団や本会議の流れ自体に関する質問は、後ほどまとめて回答する。

○平田 晶美（看護学類）

龍田に対して質問する。委員会を超えたイベントの主催について述べていたが、委員会ごとに活動の曜日が決まっており、それぞれずれていると思う。イベントを開催する日程や時間についてはどのように考えているか。

○龍田 和志（副議長候補・人文学類）

質問に感謝する。バーベキューや旅行といった大きなイベントは、基本的に土曜・日曜や、春C・秋Cなど授業数がやや減って空きコマがまとまる期間に、皆が集まりやすく時間を確保しやすい時間帯に設定しようと考えている。それに加えて、私は全代会の談話室の活用を行いたい。たとえば委員会の終わった後や委員会の合間に、手の空いている構成員で、お月見の時期に団子を作って食べるような小さなイベントを高頻度で行っていきたいと考えている。他の例で言えば、私は個人的に委員会にコーヒーを配りに行っているが、そのように委員会中・委員会後にできる小さなイベントを、特定の曜日に固まらないよう協力者を集めながら開催していきたいと思っている。

○綱木 映法（議長・社会学類）

龍田・藤井に対して質問する。ジャケットについて言及されていたが、ジャケットを着るということは全代会の組織を背負うということである。これ以上、どこでどのように活用を拡大するのか、今も活動が増えている中でイメージが浮かばないので、具体的に伺いたい。

○龍田 和志（副議長候補・人文学類）

確かに、宿舍入居支援など委員長陣が主導する大きなイベントではすでにジャケットを着用しているが、4月にあった駐輪場調査などでは、最初の方はジャケットを活用していなかった。しかし、その後ジャケットを活用したことで教職員に認知されたという話を実際に聞いたので、これまで使ってこなかった場面でも活用するようにしていきたいと考えている。

○藤井 新之助（副議長候補・国際総合学類）

私もほぼ同様である。全代会が外で活動する際に、これまで駐輪場調査で着ていなかったジャケットを着るという施策をした。今後も同じように、全代会が外で活動する際に、もっと気軽にジャケットを着ることが普通になるようにしていきたい。決して投げやりに着ればよいというものではないという点は意識している。以上である。

○綱木 映法（議長・社会学類）

関に対して質問する。意見交換によって声をつなぐことが大切だと述べていたが、既存の取り組みに対して新規性が感じられず、現状を踏襲しているように思える。結局、声をつなぐことが実現できないのではないか。そこに対する打開策をもう少し説明いただきたい。

○関 智亮（副議長候補・知識情報・図書館学類）

この意見交換の取り組みは、私が定義した 4 つ、教職員・学生・クラス代者・全代会構成員の全てか、どこか 1 つに限定したものか。

○綱木 映法（議長・社会学類）

とりわけ、ランチミーティングなど教職員からの意見交換について、新規性があるかという趣旨である。

○関 智亮（副議長候補・知識情報・図書館学類）

これまでのランチミーティングは、基本的に個々人が会ったときのやり取りがメインだったと認識している。今回私がやりたいのは、一般の学類等代表や専門委員からの意見の聴取である。具体的には、各委員会の訪問や、ランチミーティングの際に「こういうことを聞いてもらいたい」というスレッドやフォームを立て、ランチミーティング用に受けるもの、あるいは全代会として議長団に特別に聞きたいものをセットできればと考えている。意見箱はあったと思うが、より「ランチミーティング」に絞り、焦点を絞って聞きやすくする点が新しいポイントだと考えている。

○綱木 映法（議長・社会学類）

藤井に対して質問する。意見聴取会というものの自体は本会議の軽量化のために作られたものなので、それが軽量化の役割を果たしていないとすれば大きな問題である。改善策はよいが、どのような課題があると考えているのかを伺いたい。

○藤井 新之助（副議長候補・国際総合学類）

意見聴取会の問題点は参加率が少ないことである。意見聴取会に来ない理由として「意見聴取会に来て聞いてもよくわからない」というものがある。自分の経験として、どんな質問が来てどんな回答があったかという一覧があると聞いていたが、それがどこで共有されているのかわからないということがあった。そういう部分を改善して、意見聴取会を来た人にとってわかりやすい形にすることから始めたい。なお、本会議の運営自体は昨年がほぼ完璧に近いと考えており、これ以上の劇的な改革ができとは思っていない。ただ、昨年の継続だけでは志としてよくないので、私が追加できる価値として意見聴取会の最適化を申し上げた。以上である。

○綱木 映法（議長・社会学類）

最後に、お三方に同じ質問をする。私は議長に就任することになったので、これから一緒に活動することになるが、議長に求めることや、逆に副議長として頑張れることを伺いたい。

○龍田 和志（副議長候補・人文学類）

綱木さんに求めることは、議長としての顔、そして自身でもおっしゃっていたように、学長・副学長や他大学に対する対外的な交渉役である。また、昨年度から委員会で一緒に活動していた身としては、副議長や各委員会にしっかりタスクを分散し、ご自身の限界を超えないようにしていただきたい。その点で、私は副議長として、また総務委員会で実働を行ってきたので、同じように積極的に動いていくし、綱木さんが取り組まないところに取り組み、補完していきたい。

○関 智亮（副議長候補・知識情報・図書館学類）

議長に求めるところは2点である。1点目は外のところである。他大学との交流や海外研修など国外・国内を越えて学外との交流をメインに展開していただきたい。2点目は、特にタスクの割り振りである。綱木さんが所属していた総務委員会は、本会議の準備・会計・物品申請など全代会内部の仕事が中心の委員会だと思う。一方、私の所属していた生活環境委員会は全代会の外を向いた活動が多い。そうした所属委員会ごとのノウハウやスキルを生かし、それぞれのバックグラウンドや個性を生かしたタスクの割り振りをお願いできればと考えている。

○藤井 新之助（副議長候補・国際総合学類）

私と綱木さんのビジョンや課題感はかなり近いと感じているので、綱木さんが挙げた課題解決に邁進していただければ言うことはない。あえて言うなら、ご無理なさらないでいただきたい。私が逆に補完としてできることは、先ほど「内向きなことをしてほしい」とおっしゃっていた点である。私のビジョンは「一人ひとりに寄り添う」なので、仲間を越えて一人ひとりの構成員と向き合うことができるし、そうしたいと思っている。

○綱木 映法（議長・社会学類）

ありがとう。無理のないように気をつけるし、知らないことがあればぜひ教えていただきたい。

○吉川 栞（令和7年度議長）

続いて、社会工学類・近藤に質問をお願いします。オンラインのため、そちらから音声を出してほしい。

○近藤 哲弘（社会工学類）

龍田・関の 2 候補に質問させていただきたい。お二人とも、広報委員会以外の委員会にも SNS を投稿できるようにしたいということだったが、アカウントを共有してしまうと、発信する内容・文章のチェックを広報委員会できなくなる。そうすると責任の所在が不明になることに加え、より重要な点として、全大会の公式リリースとしてふさわしくないものが出てしまいかねない。この問題をどうクリアするつもりか伺いたい。

○龍田 和志（副議長候補・人文学類）

質問の中に、私が「他委員会による投稿を可能にしたい」と述べたと受け取ったと思われる部分があったが、私自身はそれを必ず可能にしたいと考えているわけではなく、あくまで「そういった意見が上がってきた」という点でお話ししただけである。ご指摘のとおり、情報のセキュリティや投稿内容の管理を広報委員会が把握できないという問題がある。ですので、私は、自分で SNS を投稿したいと意見を挙げた委員会と、広報委員会、または委員長連絡会の中で、SNS の活用について話し合っていきたい。その際、私は総務委員会に所属しているので、これまでホームページの更新を行ってきた情報部門から情報発信のノウハウを学ばせていただき、それを生かして、より良い発信の仕方・SNS の利用の仕方を考えていきたい。

○近藤 哲弘（社会工学類）

（音声聞こえなかったため再度依頼。）

○龍田 和志（副議長候補・人文学類）

（再度回答）私自身は、必ずしも各委員会による SNS 発信を行いたいとは考えていない。ご指摘のとおり、情報や投稿内容の管理の把握が広報委員会で難しくなる問題があるので、意見を出していただいた委員会・広報委員会・委員長連絡会などの場で議論していきたい。私は総務委員会に所属しているので、これまでホームページの更新を行ってきた情報部門のノウハウを、SNS の新たな活用方法を模索するのに生かしていきたいと考えている。

○関 智亮（副議長候補・知識情報・図書館学類）

これまで、全大会全体のメールアドレスは委員長陣が閲覧・投稿できる権限を持つシステムであったと認識している。SNS についても、それと同様の運用ができればと考えている。具体的には、投稿のセキュリティについては、管理ツールを仕切ってきた情報部門による研修、投稿の基準等については広報委員会による研修を踏まえて行えればと考えている。責任の所在については、投稿の最後に「総務委員会」などの作成主体や、氏名のイニシャルを付け加えることで明確にできるのではないかと考えている。これらでクリアは可能だと考えている。広報委員会にはすでに Campus などがあるので、そちらに注力していただきたい

し、SNS の全体的な管理権限も広報委員会が担うのが最もふさわしいと考えているので、お願いしたい。

○近藤 哲弘（社会工学類）

関に、責任の所在について続けて伺いたい。情報は、出てしまってからでは遅い。現状は Teams のお問い合わせチャンネルで上げる内容を管理しており、たとえば生環では、出す情報を Teams 上で一度共有してから発信している。そのリスクを抑えるために、結局はどのように管理することになるのではないか。そうすると、広報委員会一括でやっているのと大して変わらないのではないか。つまり、広報委員会以外でも、出す内容について一度、全体としてチェックが必要なのではないか。どのように考えるか。

○関 智亮（副議長候補・知識情報・図書館学類）

個人的な認識になるが、これまで生活環境委員会のイベントなどで、発信までに時間差が生じてしまったことが一番のきっかけである。当日、適宜案内をするのが難しかった面があるので、あらかじめ Teams 上で概要を提示しておき、具体的な案を投稿する、というように、広報委員会が必ずしも同席しないタイミングでも次の発信ができるような形にできればと考えているが、この点についてはいかがであるか。

○近藤 哲弘（社会工学類）

内容についての確認はそれでできると思うが、細かい文章、例えば、ら抜き言葉になっていないかといった確認が疎かになってしまうのではないかという懸念がある。文章の誤りが出ないかが少し不安だが、その点はどう考えるか。

○関 智亮（副議長候補・知識情報・図書館学類）

この点については、広報ツールとしてのホームページと SNS の運用方針を変えればよいと考えている。SNS はできる限り即時性を重視し、ホームページは正確性を重視する、というのが具体的な方策である。ら抜き言葉などはよくないが、その分のメリットとして即時的な発信や、広報委員会が対応できないタイミングでの返信など、場合に応じた対処ができる。デメリットを上回るメリットがあると思っている。文章の誤りが生じるという不安点を解消するため、できる限り研修を行えばよいと考えている。

○吉川 栞（令和 7 年度議長）

質問者・回答者ともに簡潔に願います。現在 20 時 40 分となっているため、質疑応答は現在フォームに来ているもので締め切る。なお、本日は投票を行わず、来週の第 2 日程で

投票を行うこととなる。引き続き、現在フォームにある質疑応答を行うが、これ以降はフォームに記入しないようお願いする。続いて、情報科学類・櫻田に質問をお願いする。

○櫻田 翔（情報科学類クラス代表者会議副議長）

龍田に質問する。談話室の活用について触れていたが、現状、談話室に入るハードルのようなものを取り払わなければならないと考えている。自分自身もそこを課題に思っているので、何か改善案などを考えていることがあれば回答してほしい。

○龍田 和志（副議長候補・人文学類）

質問に感謝する。談話室に入るハードルについて、一つ考えているのは、現在私が行っているポットサービスについて、その返却を、少し面倒かもしれないが委員会の人に行ってもらい、談話室に足を運んでもらうということである。そのように、委員会の後に談話室に少し足を踏み入れる機会を作り、談話室に行く習慣を少しずつ作って回数を増やし、使いやすくしていきたいと考えている。

○吉川 柊（令和 7 年度議長）

続いて、芸術専門学群・廣田に質問をお願いする。

○廣田 千恵（芸術専門学群クラス代表者会議議長）

先ほどの質問と重複する部分もあるが、お三方に質問したい。藤井候補、龍田候補は構成員の活発な交流を目指していきたいとのことだったが、全代会の活動はあくまで課外活動であり、各学類のクラス代表に選出されてそのまま学类等代表として所属しているなど、全代会の活動にあまり力量を割けない構成員もいると思う。週一回の常任委員会の活動に加え、さらに交流の時間が増えると、参加する余裕がない学生にとっては、「みんなが交流している間に自分は参加できない」というプレッシャーになってしまい、そうした学生をかえって遠ざけてしまう恐れもあるのではないかな。皆さんが考える目的は、全代会について構成員がより理解し、より良い全代会を目指すということだと考える。私も全代会に時間を割ける側の身として、客観的な視点を失わないよう気をつけたいところだが、あくまで交流は手段だと考えるので、全代会について構成員が理解し、より良い全代会を目指す気概をつくるという点で、他に手段はあるか伺いたい。関にも意見を伺いたい。

○龍田 和志（副議長候補・人文学類）

信頼関係を築くための交流以外で現時点で考えているのは、懇談会や会議といった、直接「よりよい全代会とは何か」を話し合う機会を設けることである。ただ、それもまた委員会の外でやることになるので、参加できない方には難しい。ですので、私は本当に、日々の委員会活動をそうした場にしたい。委員会を超えた人とは別の手段を用いて意見交流できる

ようにしたいと考えている。新しい構成員がどれほど全代会に関われるかはまだ未知数なので、具体的にどういったことを行っていくかは、これからの活動の中で考えていく所存である。

○藤井 新之助（副議長候補・国際総合学類）

続いて私から回答する。おっしゃるとおりである。普段と違うコミュニティを作ること、そこに入れない人がかえって排斥されてしまうのはあり得ることだと思う。逆にどうすべきかといえば、コミュニティを持っている側、すなわち全代会に労力をかけられる側が、かけられない側に寄り添って関わりを持っていくべきだと考えている。具体的には、その委員会を訪問する、あるいは本会議の場で話をする機会を作るなど、追加の負担を生まない形の新しい機会を作っていきたいと思っている。詳しいところは、私やその他の方々の会話を通じて考えていきたい。以上である。

○関 智亮（副議長候補・知識情報・図書館学類）

続いて私から回答する。直接の指摘ではなく全体的な意見ということだと理解した。私の回答としては、クラス代表者として、また副次的に全代会構成員として、委員会の広報という面に対応してきた経験を踏まえると、対面には、直接目の前で話し方や温度感を見られるというメリットがある。ただ、それに参加できない人は必ずいるので、その際は必ず Teams やオンラインを併用し、あるいは録画を配信するなど、オンラインで対応できるようにしたい。あわせて動画配信や文書といった形も入れたい。また、他のことについても、フォームや Teams 上のやり取りで、どんな時間でも、どんな場所でも、form の場合は匿名でもできるようにすることを原則としたい。そうすることで、ある程度、取り残される人が出にくくなると思っている。以上である。

○吉川 柊（令和 7 年度議長）

ここで、第 1 回本会議の流れ自体に関する質問に回答する。本日は投票を行わず、第 1 回本会議の第 2 日程として、来週水曜日の同じく 18 時 30 分から、本日と同じく 3A204 教室で投票を行う。第 2 日程の出席確認フォームを流しているので、回答をお願いします。

これにて第 1 回本会議を休会とする。副議長選挙の投票は第 2 日程で行う。

休会

以上

以上 総務委員会作成